江戸時代の城めぐり

～おかやまの城と陣屋～

ももっち・うらっち
と一緒に
たずねてみよう！

岡山県マスコット
ももっち・うらっち

はじめに

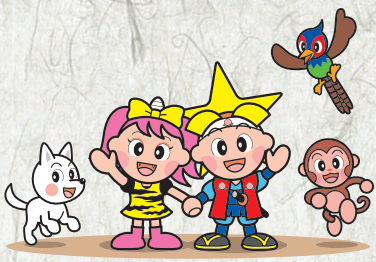
「城と陣屋」

「城」と聞いて、みなさんはどのような姿を思い浮かべるでしょうか。観光で各地の城を訪れたり、住んでいる地域にある身近な城に行ったことがある人もいると思います。そして、みなさんの多くが思い浮かべるのは、高くそびえる天守閣を持ち、城下町を見下ろすような城ではないでしょうか。江戸時代の城は、天守閣や櫓などの建物、城の土台となる石垣、そのまわりを取り囲む堀などの施設からなっています。実は天守閣をもつ城は織田信長が築いた安土城が初期の代表的な例で、それ以後、天守閣が多く築かれるようになりました。

では、城とは何のために作られたのでしょうか。

城が持つ第一の機能は防御することにあり、戦のときは領主が家臣とともに立てこもり、外敵からの攻撃に備えます。そのために周囲に塀をめぐらすことで防御の機能を高めた城を築きます。このことは城の立地にも関係していて、戦がたびたびおきていた室町時代の終わりころ（＝いわゆる「戦国時代」）までは、守りを固めやすい山の上に多くの城が築かれました。このような城を山城といいます。

城の第二の機能は、領主の政治と生活の場としてのものです。領主は城に居住し、政治を行います。城下町は城を中心に整備された都市です。「戦国時代」までは、山城のふもとに城下町が築かれていることが多かったのですが、江戸時代になって幕府による支配が確かなものになると、防御より、政治の場としての機



能が重視されるようになって、低い丘陵と周辺の平地を利用した平山城や、平地を利用して築かれる平城が多くを占めるようになりました。

江戸時代、幕府から土地を与えられた大名のすべてが城を持つことができたわけではありません。規模の小さな藩や、旗本が支配する土地には、城のように大規模な防御の設備を持たない、役所と屋敷を兼ねた施設が建てられました。これを「陣屋」と呼びます。

日本には、復元されたものも含めてたくさんの城や陣屋があり、地域の歴史を知ることのできる貴重な場として、よりいっそうの活用が求められています。このガイドブックでは、岡山県内各地に所在する城と陣屋を紹介しますので、身近にある城や陣屋をぜひ訪ねてみてください。

豆知識

天守閣：城の中心に建てられた高層の建物のこと。遠くを見渡す展望台としての実用的な役割以外に、城の象徴（シンボル）として城主の力を見せつける意味があったと考えられます。

旗本：１万石（４ページ参照）未満の土地を与えられた、将軍に直接仕える家臣のこと。将軍に面会できない身分の者は御家人という。

岡山城跡（岡山市北区丸の内）国指定史跡

写真提供：岡山県立記録資料館

旭川からみた天守

岡山藩主池田家の居城として知られる岡山城ですが、岡山城が現在残る形に整えられたのは、宇喜多氏の時代です。宇喜多直家は、金光氏が石山（現在、岡山市民会館や旧内山下小学校がある丘陵）に置いていた本丸を、岡山と呼ばれていた現在の岡山城天守がある丘へ移しまし

写真提供：岡山県立記録資料館

本丸西側の石垣

た。そして子の秀家が大規模な改修を終えたのが、慶長２年（1597年）のことでした。ところが宇喜多秀家は、慶長５年（1600年）の関ヶ原の戦いで西軍として戦って敗れたため、東軍大勝のきっかけをつくったと言われる小早川秀秋に宇喜多秀家の領地のうち備前・美作両国が与えられ、秀秋が岡山城主となりました。彼が外堀（現在の国道53号線　柳川筋）を整備したことにより、城の範囲は大きく拡大しました。

しかし、わずか２年後の慶長７年（1602年）に小早川秀秋が若くして亡くなると、跡継ぎがなかったため、小早川家は断絶。かわって姫路藩主池田輝政の二男で、徳川家康の孫にあたるわずか５歳の池田忠継に備前国が与えられました。しかし幼少のため兄の利隆が岡山城に入り、忠継に代わって備前国を治めました。利隆は西の丸を築き、そこに住みましたが、本丸の改修も行っています。慶長18年（1613年）、輝政が亡くなると、利隆が姫路へ移り、忠継が岡山城に入りましたが、わずか２年後に亡くなり、代わって弟の池田忠雄が岡山に入り、備前国を中心に31万5000石を治める大名となりました。忠雄も城の改修を行い、その後、大きな改修は行われていないことから、忠雄の時代に岡山城はほぼ現在の姿になったと言えます。寛永９年（1632年）、忠雄の子光仲と利隆の子光政が入れ替わる形で、光政が岡山藩主となり、以降明治維新まで池田家の支配が続きました。

岡山城は、岡山・石山・天神山（現在、天神山文化プラザや岡山県立美術館がある丘陵）の三つの丘陵を利用して築かれた平山城です。旭川の流れを変えて、本丸の北と東を守る天然の堀として利用しているため、旭川沿いから見ると、その大きさはい

豆知識

石：容量を表す単位。容量を表す単位には、他に合、升、斗があり、１石は1000合にあたります。米１合は約180mlにあたります。また、石は江戸時代には、土地の規模を表す単位としても使われました。例えば土地における生産量を米の収穫量で示したものを石高といい、石高１万石の土地というと、１万石の米が収穫できる土地ということになります。

西の丸西手櫓

っそう際立ちます。「烏城」という別名でも知られている岡山城ですが、これはカラスのように黒い外壁に由来しています。黒い外壁も、安土城、豊臣秀吉が築いた大坂城、毛利輝元が築いた広島城など、初期の天守閣によく見られる特徴です。発掘調査では、金箔で飾った瓦が出土していて、豊臣秀吉との関係の深さを示す資料として注目されています。

明治時代以降も岡山城天守閣は残されていましたが、昭和20年（1945年）６月29日の岡山空襲で残念ながら焼けてしまいました。現在の天守閣は、戦後再建されたものです。本丸月見櫓・西の丸西手櫓は江戸時代当時のまま残る貴重な建造物で、どちらも国指定重要文化財となっています。月見櫓は池田忠雄が城の改修を行ったときに、城の背後（「搦め手」といいます）の備えとして築いた櫓です。西の丸西手櫓は池田利隆のとき、西の丸の西側の備えとして築かれた櫓です。

岡山城は、宇喜多氏による築城以降、小早川氏、池田氏それぞれの時代に改修されてきたので、築かれた時期によって異なる石垣の築造技術を見ることができます。岡山城を訪れた際には、石垣に注目してみてはいかがでしょうか。また、岡山城周辺には、江戸時代に築かれた石垣を見ることができる場所がいくつもありますから、街なかでそれらを探すのも楽しいと思います。旭川をはさんだ対岸には、日本を代表する大名庭園である後楽園があります。岡山藩主が眺めたように、後楽園から見た岡山城を楽しんでみてください。

岡山城天守閣利用案内	
観覧時間	午前９時～午後５時30分（入館は午後５時まで）
休館日	12月29～31日
入場料	大人　300円（団体240円）　展示入替期間 150円 小中学生 120円（団体100円）　展示入替期間　60円
※入場料の減免、後楽園・林原美術館・岡山市立オリエント美術館等との共通券について詳しくは岡山城事務所までお問合せください。	
電話	086-225-2096（岡山城事務所）

交通アクセス	
●バス利用で、岡山駅から岡電バス「岡電高屋行き」、両備バス「東山経由西大寺行き」いずれも「県庁前」で下車、徒歩５分	
●路面電車利用で「岡山駅前」から「東山行き」に乗車、「城下」下車、徒歩10分	
駐車場	烏城公園駐車場を利用してください。
料金	１時間300円（30分追加100円）
※岡山城天守閣の入場者は、駐車料金が150円割引になります。 ※普通車専用　バスは応相談 ※詳細は烏城公園駐車場へ（086-226-4809）お問合せください。	

下津井城跡（倉敷市下津井、下津井吹上）

県指定史跡

宇喜多秀家がこの場所に城を築いたのが城の始まりとされています。姫路藩主池田輝政の重臣であった池田長政（忠継の叔父）が慶長８年（1603年）に近世城郭として整備を始め、慶長11年（1606年）に完成したとされているので、関ヶ原の戦いのあとに本格的に整備された山城として大変貴重なものです。寛永16年（1639年）、城主であった岡山藩家老池田由成は天城陣屋に移りました。城跡を再利用できないようにするためなのか、石垣は大きく破壊されていますが、写真のように残存状態の良好な部分もあります。

一国一城令：
江戸幕府が全国の大名に対して、大名が住んでいる城を残して、他の城を取り壊すように命じた法令のこと。

家老：
最も高い地位にあった家臣のこと。岡山藩には６人の家老がいました。

備中松山城跡（高梁市内山下）国指定史跡

備中松山城跡は、高梁市にある山城です。江戸時代に建てられた天守閣が現在も残る城は全国に12ありますが、そのうち最も標高の高い場所にある城がこの備中松山城で、天守閣は臥牛山の峰の一つ、小松山の山頂標高約430mに建てられています。

備中松山城跡がある臥牛

大手門周辺の石垣

大手門周辺の石垣

山には、南北に延びる尾根上に中世から近世にかけて城が築かれていて、それら全体が国の史跡に指定されています。史跡指定地は、臥牛山に８ヶ所点在しています（８ページ図参照）。また、天守閣、二重櫓、三の平櫓東土塀は国の重要文化財（建造物）に指定されています。

慶長５年（1600年）の関ヶ原の戦い以降、備中国を治めるために派遣された小堀氏が在城したのち、池田氏→水谷氏→安藤氏→石川氏→板倉氏と城主は変わり、板倉氏が８代にわたって藩政を担ったのち明治時代にいたります。備中松山藩として成立したのは池田氏の時ですが、城の整備は小堀氏のころに始まっていました。天守閣や二重櫓が現在の形に整備されたのは天和３年（1683年）のことで、水谷勝宗が備中松山藩主としてこの地を治めていたころにあたります。彼は城の整備だけでなく、山の麓に御根小屋と呼ばれる藩主の住まいを兼ねた政庁を築きました。ここには現在、岡山県立高梁高等学校がありますが、周囲を取り囲む石垣がよく残されています。水谷氏が治めた時期は、高梁川河口付近の新田開発や玉島港の整備も行われて、備中松山藩における藩政の基礎が固められた時代でした。

備中松山城は、小松山の山頂周辺の地形をたくみに利用して防御性を高めていますが、それによって城に近づいて見た時により立派に見せる視覚的な効果も大きかったと思われます。大手門周辺の石垣とその北側の高い崖の姿は、そのような備中松山城の特徴をよく表しています。

備中松山城跡の最大の見どころは、江

戸時代当時の建物が現存し、山城本来の姿を見ることができるということにありますから、実際に山に登って、その立地や城からの眺(ながめ)めを体感(たいかん)することをおすすめします。大手門付近から見上げると、重なり合うように築かれた石垣は見事で、堅固(けんご)な山城の姿を今に伝えてくれます。

御根小屋跡

周辺略図

利用案内	
開城期間	4月～9月(午前9時～午後5時30分) 10月～3月(午前9時～午後4時30分)
休城日	12月29日～1月3日
入城料	大人300円、小中学生150円 (団体割引あり　30人以上1割引、100人以上2割引)
駐車場	ふいご峠駐車場　14台 ※シャトルバス運行中は、城見橋公園・ふいご峠間の自家用車の通行はできません。
	城見橋公園駐車場　110台
シャトルバス	城見橋公園駐車場・ふいご峠駐車場間
	往復300円(中学生以上、約15分間隔)
	土・日・祝日及び繁忙期に運行 (12月第4週～2月末日は運休) ※雨天の場合は、運行中止となる場合があります。 (その場合は8合目まで自家用車で登城可能です。)
電話	0866-22-1487

豆知識

大手門：城の背後を搦(から)め手(て)と呼ぶのに対し、城の表を大手(おおて)と呼びます。元々は追手(おうて)と書いていましたので、そのように呼んでいることもあります。大手門は、その名のとおり、城の表側に作られた、城の顔と言えるような門のことです。

庭瀬城跡（岡山市北区庭瀬）

庭瀬藩は、宇喜多家から離れた戸川逵安が、関ヶ原の戦いでの功績によって、備中の都宇郡・賀陽郡の一部２万9000石余を与えられたことに始まります。戸川氏のあと、庭瀬藩は、幕府領などを経て、元禄12年（1699年）以降は板倉氏が幕末まで支配を続けました。現在、清山神社がある場所の周囲が内堀、その北側約200mにある用水が外堀にあたると考えられます。外堀の北側を通る道は、岡山と鴨方を結ぶ鴨方往来で、庭瀬は宿場としても栄えました。戸川氏の時代には、現在撫川城跡とされている場所にも城が広がっていましたが、板倉氏の時代には、撫川城跡付近には、分家した戸川氏の陣屋（20ページ参照）が置かれ、庭瀬藩とは別の領地になっていました。

足守藩主木下家屋形構跡

（岡山市北区足守）市指定史跡

足守藩は、現在の岡山市北区足守に置かれた石高２万5000石の藩です。初代藩主木下家定は、豊臣秀吉の正室北政所の兄です。その子勝俊のとき、所領を没収されたが、慶長19年（1614年）～慶長20年（1615年）の大坂の陣での功績によって、木下利房（勝俊の弟）が父家定の旧領を与えられ、足守藩が再興され、木下家による支配は、明治４年（1871年）の廃藩置県で足守県になるまで続きました。足守藩の陣屋は、足守川の右岸に整備されました。

現在、岡山市立足守小学校の隣に、藩主の居館であった屋形構跡があり、堀を挟んでその周囲に武家屋敷が配置されました。堀は幅が狭いので、防御を意識したものではありません。その奥には大名庭園近水園（県指定名勝）もあり、武家屋敷などとともに陣屋町の風情を楽しむことができます。

浅尾藩陣屋跡（総社市門田）市指定史跡

浅尾藩主蒔田氏は江戸時代の初めから幕末までこの地を支配していましたが、１万石以上の領地を与えられて大名として支配したのは、江戸時代初期と幕末の文久３年（1863年）から明治４年（1871年）の廃藩置県までの間のみで、それ以外は旗本として幕府に仕えていました。文久３年（1863年）、最後の藩主となった蒔田広孝は幕府に願い出て、石高を１万石とすることを認められ、これを機に陣屋を浅尾に新築しました。陣屋には、周囲に土塀がめぐらされ、その内側の敷地内に、藩主の館を中心に家臣の屋敷が配置されました。慶応２年（1866年）、長州（今の山口県）藩から脱走した第二奇兵隊の一部隊士によって襲われ、焼失してしまいました。現在は、復元された土塀以外に、一部残った当時の土塀も見ることができます。

成羽藩陣屋跡（高梁市下原）

元和３年（1617年）、山崎家治が備中成羽３万石を与えられ、成羽藩が成立しました。家治はその後肥後国天草に移され、水谷氏がかわって支配しました。その後水谷氏が備中松山藩へ移ると、万治元年（1658年）に山崎家治の子豊治が父の旧領の一部5000石を与えられ、この場所に陣屋をつくりました。明治元年（1868年）になって石高が１万2700石余りあることを幕府に申し出て認められたことにより、山崎氏は再び大名となりました。当時の建物は残っていませんが、美術館の周囲に残る石垣がかつての面影を伝えてくれます。高梁市立成羽小学校前の石垣が水谷氏の時代に築かれたもので、成羽美術館前の石垣は山崎豊治が整備したものと考えられます。

新見藩陣屋跡（新見市新見）

元禄10年（1697年）に津山藩主森氏がお家とりつぶしとなった際、津山藩２代藩主森長継の実子・関長治が美作国内の領地から現在の新見市など１万8000石の領地へ移され、新見藩は成立しました。以降、９代にわたって関氏の支配が続き、明治時代を迎えました。

関長治は、経済的に発展していた新見に陣屋を置き、陣屋町として整備しました。陣屋があった場所には、現在は新見市立思誠小学校があり、江戸時代当時の建造物などは残っていませんが、思誠小学校の敷地内には藩校思誠館跡を示す石碑が建てられています。

津山城跡（津山市山下）国指定史跡

写真提供：津山市

津山城跡のある鶴山公園は、県内有数の桜の名所として知られ、春には多くの人が訪れて桜を楽しむ憩いの場となっています。江戸時代当時の建物は明治時代に取り壊されてしまって現存していませんが、城を取り囲む壮大な石垣は、かつての津山城の堂々とした姿を想像させてくれるのに十分なもので、石垣の織りなす景観は津山城跡の一番の見どころです。

美作国は、備前国などとともに宇喜多秀家に与えられていましたが、関ヶ原の戦いのあと、小早川秀秋の領国となりました。小早川氏断絶後、森忠政が18万石を与えられ、美作国に入りました。忠政はいくつかの候補地から鶴山と呼ばれていた丘陵を選んで築城を開始して、津山と名を改めて元和２年（1616年）に完成しました。忠政は、津山盆地の中央に築いた津山城の周辺に城下町を整備し、津山藩の基礎を築きました。

表中門跡

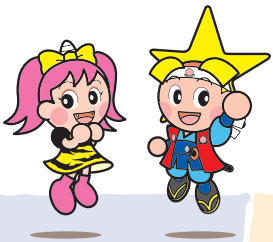
本丸、二の丸、三の丸と大きく３段に分かれていますが、それぞれが高い石垣に囲まれていて、城の南側の吉井川、東側の宮川が堀の役割を果たし、津山城は大変堅固な作りの城だったと考えられます。城の東側にある丘陵からの攻撃を警戒し、本丸東側は特に高い石垣が築かれていることも、防御を強く意識した津山城の特徴と言えます。

忠政以来森氏の支配が４代続いたあと、跡継ぎの養子が急死したため森氏はとりつぶしとなり、かわって越前松平家（徳川家康の次男結城秀康に始まる家柄）の流れをくむ松平長矩が美作10万石を与えられ津山藩主となりました。津山藩は廃藩置県まで続きました。

平成17年（2005年）には、備中櫓が復元されました。備中櫓という名称は、森忠政の娘婿にあたる鳥取藩主池田備中守長幸に由来すると伝えられています。備中櫓は本丸南側に位置しているので、城の南側から津山城跡を見ると大変目をひく存在です。

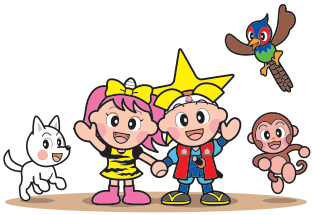
季節ごとの津山城跡を備中櫓とともに楽しんでみてください。

南から見た津山城跡



桜と備中櫓

また、津山城跡の北には、津山藩主森氏が築造した大名庭園である旧津山藩別邸庭園（衆楽園）があり、国の名勝に指定されています。こちらも訪ねて、池を中心に広がる庭園の風景を楽しんでください。



鶴山公園利用案内	
入園時間	午前8時40分～午後7時 （10月～3月は17時閉園、4月1日～15日のさくらまつり期間中は午前7時30分～午後10時）
休園日	12月29～31日
入園料	大人300円、小人（中学生以下）無料 団体30名以上2割引
交通案内	中国道津山ICから車で15分・院庄ICから車で15分、JR津山駅から徒歩10分
駐車場	津山観光センター駐車場利用可能（無料） ※桜祭り期間中は有料。
電話	0868-22-4572（鶴山公園切符売り場）

勝山城跡（真庭市勝山）市指定史跡

勝山は、旭川の最も上流にある高瀬舟の舟着場として栄えた町で、美作地方西部の中心地でした。明和元年（1764年）に三浦明次が三河国西尾から移されて２万3000石を与えられ、勝山藩が成立しました。明次は、中世に築かれていた高田城の跡の整備をはじめ、名前を勝山城にあらためました。絵図によると、本丸、二の丸、三の丸のほか、いくつかの郭からなり、天守閣は築かれませんでした。二の丸があった場所は現在グラウンドになっていますが、二の丸の一部には写真の石垣が残っています。城の側を流れる旭川は、城の北と西を守る天然の堀の役割を果たしています。

豆知識

郭：曲輪とも書きます。石垣などで囲まれた平坦な区画のことをいい、郭が集まって一つの城を形づくります。

周辺略図

鶴田藩西御殿跡（津山市桑下）

市指定史跡

鶴田藩は、幕末から明治時代初めにかけて存続した藩です。慶応２年（1866年）の第２次長州征討のとき、石見（今の島根県西部）浜田藩主松平武聰（父は水戸藩主徳川斉昭）は長州軍に敗れて、住んでいた浜田城に自ら火を放ってのがれました。このため翌年、現在の津山市から美咲町などにあった8000石の領地（飛び地）に移り住んで、のちに藩名を鶴田藩に改めました。

明治２年（1869年）には藩の石高は６万1000石となり、浜田藩時代の石高に戻り、藩庁や藩主の館の建設が計画されました。館は明治４年（1871年）に完成しましたが、まもなく廃藩置県となり、藩主武聰は東京へ移ることになりました。藩主の館であった西御殿跡には長州征討で亡くなった藩士を慰霊する石碑が建てられています。

旗本たちの陣屋

【戸川氏の陣屋】

庭瀬藩を治めた戸川氏（10ページ参照）は、４代安風のとき、跡継ぎがなく断絶しましたが、弟逵冨が本家を継いで旗本として存続したほか、他の分家もそれぞれ陣屋を構えていました。ここでは、戸川氏が築いた陣屋をいくつか紹介します。

撫川陣屋跡
（岡山市南区撫川）

４代安風の弟逵冨は、撫川の1000石を分けられ、その後延宝７年（1679年）に安風が幼くして亡くなったため、戸川家本家を継ぐことになり、4000石が加えられ5000石の旗本になりました。逵冨が置いた陣屋が、現在撫川城跡となっている場所の周辺にあったと考えられます。

早島陣屋跡
（都窪郡早島町早島）町指定史跡

初代庭瀬藩主戸川逵安が亡くなり、寛永５年（1628年）子の正安があとを継いだとき、弟の安尤、安利にもそれぞれ3400石、3300石が分け与えられました。安尤に始まるのが早島戸川家で、幕末まで続きました。早島の陣屋は現在の早島町立早島小学校付近にあり、写真の堀や石橋が残っています。

帯江陣屋跡
（倉敷市羽島）

戸川逵安の3300石を継いだ安利に始まるのが帯江戸川家です。倉敷市羽島に陣屋を置いていました。現在は石碑が建てられており、当時の遺構は残っていませんが、残された絵図によると、山すそに塀で囲まれた陣屋が築かれていたと考えられます。

妹尾陣屋跡
（岡山氏南区妹尾）

２代庭瀬藩主戸川正安を子の安宣が継いだとき、弟の安成に1500石が分けられ、妹尾に陣屋を置きました。現在、この場所に残されているのは、岡山市指定重要有形民俗文化財となっている井戸のみです。ただし、現在、笠岡市立笠岡小学校にある校門は、妹尾の陣屋門を移築して小田県庁の正門として使用されたものなので、妹尾陣屋の建物が残っている貴重な例ということになります。

【水谷氏の陣屋（新見市大佐小阪部）】

備中松山藩主水谷勝隆の子勝能は、寛文４年（1664年）に2000石を与えられ、小阪部に陣屋を置きました。これが小阪部陣屋の始まりで、その後７代まで続き、明治維新を迎えました。川沿いの公園の一角に礎石の一部が残っています。また、この場所には、明治３年（1870年）に備中松山藩の財政建て直しに活躍した山田方谷が私塾小阪部塾を開いたことも知られ、公園には「方谷山田先生遺蹟碑」が建てられています。

水谷氏の本家は、３代勝美にあとつぎがなく、とりつぶしとなりますが、弟の勝時が家を継ぐことを許され、布賀（現在の高梁市備中町）などに3000石の領地（のち3500石）を与えられ、明治時代まで続きました。

所在マップ

1 岡山城跡	岡山市北区丸の内	
2 下津井城跡	倉敷市下津井、下津井吹上	
3 備中松山城跡	高梁市内山下	
4 庭瀬城跡	岡山市北区庭瀬	
5 足守藩主木下家屋形構跡	岡山市北区足守	
6 浅尾藩陣屋跡	総社市門田	
7 成羽藩陣屋跡	高梁市下原	
8 新見藩陣屋跡	新見市新見	
9 津山城跡	津山市山下	
10 勝山城跡	真庭市勝山	
11 鶴田藩西御殿跡	津山市桑下	

■発行日　平成27年８月５日
■発　行　岡山県教育委員会
■編　集　岡山県教育庁文化財課
〒700-8570 岡山市北区内山下２-４-６　電話086-226-7601（直通）
■協　力　岡山県立記録資料館、高梁市産業経済部産業振興課、津山市産業経済部観光振興課
岡山県古代吉備文化財センター、岡山県立岡山城東高等学校、岡山県立博物館、
岡山市立岡山中央小学校、岡山市立芳泉中学校

表紙写真　上：備中松山城（高梁市提供）　左下：岡山城本丸月見櫓　右下：津山城の石垣